年　末　の　辞

昭和31年における協会活動の回顧

副会長　志村清次郎*

本年も早や歳末，慌しいことである．この一年間を回顧するに，わが国鉄鋼業界は輸出の振興と国内需要の著しい増加とにより近来稀に見る好況を呈し，従つてわが鉄鋼協会もまたその状勢の反映により極めて明るく経過したことは真に喜ばしい．今本年度における協会の活動並びに運営の跡の主なる事項を回顧してみたい．

1.　定款の改正：本会は大正4年の創立にかゝり，40有余年の永き歴史を有するが，定款はその当時制定せられたもので，その後数回の部分的改正はあつたが，創立当時に比して会員数も著しく増加し，又社会状勢も少なからず変化し，時勢に適合せざる状況となつのたで定款改正の必要を見るに至つた．よつて先ず前年より企画委員会において改正原案作製の任に当り，鋭意その審査を進め成案を得たので，さらに理事会及び評議員会の慎重なる審議を経て4月1日開催の通常総会に付議し，満場一致の賛成を得て会員，役員，会議，資産及び会計，支部，事務局，定款の変更並びに解散等の事項に亘り全面的改正を決定し，協会は新定款によりその活動を進めることゝなつたのである．

2.　会員拡大運動：協会の事業活動を一層豊富活潑ならしめるためには優秀なる会員を多数結集し，以て協会組織の拡大強化を計ることが急務である．よつて前年度よりの計画に従い5月より7月までの3か月間，その後更に2か月間延長して9月までの期間広く会員に呼びかけその協力を求め，また地方支部の熱心なる協力の下に会員拡大運動を起した．この期間中の入会者は正会員387名，学生会員126名，併せて513名の多数を得て成功裡にこの期間を終つた．この点に関しては今後ともに会員各位の一層の協力を切望する次第である．また同時に維持会員についても維持資金の口数増加並に新会員の勧誘を企図し9月末の口数増加24社，新規加入45社併せて69社の成果を収めたが，なおその後も引続き申込に接している．従つて昨年末にては会員数は維持会員125社，正会員4,741名，学生会員155名であつたのが，この10月末においてはそれぞれ167社，5,183名，237名と急速の増加を見るに至つたのである．

3.　春季講演大会：第51回春季大会は4月1日より4日まで東京において開催せられたが，講演数125の多数に上り盛況であつた．この大会において特に注目すべきは新たに服部，香村，渡辺の各賞牌受賞者遠藤勝治郎氏，高石義雄氏及び山本信公氏に特別講演を願つたことである．講演は3氏それぞれ平素の蘊蓄を傾けての有益なる講演で，聴講者一同に深い感銘を与えた．

4.　上吹転炉製鋼法に関する講演会：5月24日東京大学において Österreich-Alpine Montangeselschaft の技術重役 Otowin Cuscoleca 氏の上吹転炉製鋼法に関する講演会を開催した．同氏は日本鋼管株式会社の同製鋼法の技術導入に関連して来朝せられたのであつて，同社の好意により本講演会を開催することを得たのであつて，同製鋼法の権威者のお話を直接聴講するの機会を得たことは多数の出席会員一同の欣幸とするところであつて，同氏並に同社の懇情に対し深謝の意を表する．思うに上吹転炉製鋼法は発明以来日なお浅きにかゝわらず，その優秀性は既に欧米諸国における実績の証明するところであつて，製鋼業界に一大革命をもたらしたもので，わが国でも日本鋼管並びに八幡製鉄の両社に

*　三菱鋼材株式会社常務取締役兼深川製鋼所々長，工博

おいて本法を採用，建設に着手せられることゝなつたのは慶賀に堪えざるところである．なお上吹転炉法にてスエーデン国カルード式炉が考案せられ，去る5月より稼働に入つた由で，本法では傾斜回転式炉になつていて，更に優秀なる模様である．

5. 会誌総索引の完成：昨年度の 40 周年記念事業の一として会誌「鉄と鋼」第 21 年より第 40 年まで 20 年間の総索引が完成し8月に刊行，かねて申込のあつた会員に無償にて配布した．本索引はその編集には田中委員長初め編集委員各位が熱心にその局に当られ，極めて困難なる仕事が迅速に完成したもので，過去 20 年間に本会誌に掲載せられた多数の文献を著者名および題目別に編集してあり，わが国鉄鋼界の学術，技術の案内または手引として重要なる役割を果すものとしてその価値は大なるものがあると信ずる．

6. 鉄鋼製造法の刊行：米国 U. S. Steel 社の著作にかゝる「The Making, Shaping and Treating of Steel」は鉄鋼業全般に亘る技術の発達の経過と現在の技術を詳細にかつ要点を捉え，平易に述べた世界的名著であつて，鉄鋼業に携わる技術者は勿論その使用者にとつても貴重なる参考書たることは一般に認められるところであるが，本会はかねてその翻訳を企図し，田中博士を委員長とする翻訳委員会を設けて鋭意本事業に当つていたが，去る5月にこれが完成を見「鉄鋼製造法」と題し上，中，下の3巻に分割発行することとなつたが，中々評判がよいようで欣幸の至りである．

7. 鋼の熱処理の改編：さきに本協会において編著発行した「鋼の熱処理と作業標準」は実際の経験を基礎とし簡明に説明したものとして読者の好評を博し，既に改訂3版を重ねた次第であるが，その後の技術の進歩等に伴いさらに改訂の必要を認むるに至つたので，石原委員長並びに委員各位の努力により稿がまとまり，新たに「鋼の熱処理」として出版することとし，目下印刷中である．

8. 鉄鋼技術共同研究会の活動：通産省重工業局，日本鉄鋼連盟及び本協会の3者提携の下に設立せられたる鉄鋼技術共同研究会においては製銑，製鋼，鋼材，特殊鋼，熱経済技術，品質管理の各部会に分かれ，それぞれ活潑なる調査，研究を続けているが，その後さらに調査部会並に原子力部会を併置することとなり，わが国鉄鋼技術の進歩発達に貢献するところが極めて大なるものありと信ずる．

9. 秋季講演大会：10 月 11 日より3日間広島市において開催せられたが，頗る盛況であつたことは欣幸に堪えない．その思い出に関しては本号別項の「広島における第 52 回大会の思い出」と題する筆者の記事に詳しく書いておいた．

10. その他：この度生産性本部の援助を得て鉄鋼技術管理専門調査団を米国に送ることとなり，蜂谷茂雄氏を団長とし通産省，八幡製鉄，富士製鉄，日本鋼管，川崎製鉄，住友金属工業，神戸製鋼より各々1，2名の団員が参加する調査団の編成も終り，明年1月出発のこととなつている．

また次回の世界金属大会並に世界熔接年次大会への出席者の推薦，講習会の開催，来年度秋季大会の開催地等早急に決定せねばならぬ事項が多く控えているので気ぜわしい次第である．

終りに予て原子力産業会議調査団に参加，欧米に御出張中の角野会長には充分その使命を果し先月30日に無事帰朝せられたことは真に御同慶に堪えざるところである．